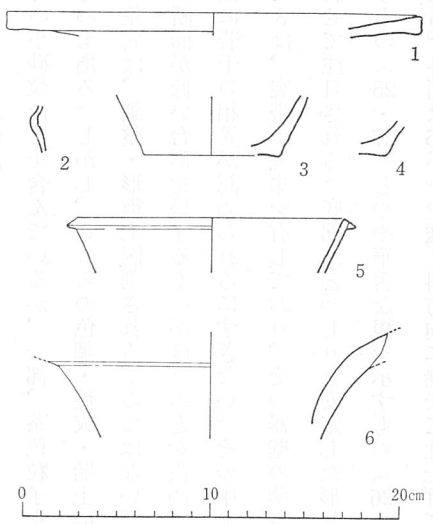


第27図　大吉備津彦命墓出土品（1/4）

壺あるいは甕の底部。ともに下面は、周縁を指でつまんで上底風にした平底で、内面は篦撫でされている。3が赤褐色、4が濃褐色を呈する。このほかに、赤褐色あるいは黄土色を呈する細片十一片があるが、器形等は不明。

その他の土器（第27図5・6）

5は、口縁部と考えられる。斜上方に立ち上り、口唇部は粘土を貼り付けて断面三角形に作る。薄手で土師質である。黄白色を呈する。長頸壺に似かよっているが、開き具合が大きすぎ、類例を知らない。6は外反しながら立ち上り、擬似口縁をなす。その外面には、上に続く部分の一部が残存している。他の土器に比べて厚手で、埴質に近い。明赤褐色を呈する。

今回採集された土器片は全体的に内外面の風化が著しく、調整技法はほとんど不明である。また、胎土中に白色砂粒を多量に含んでいる点が目立つ。

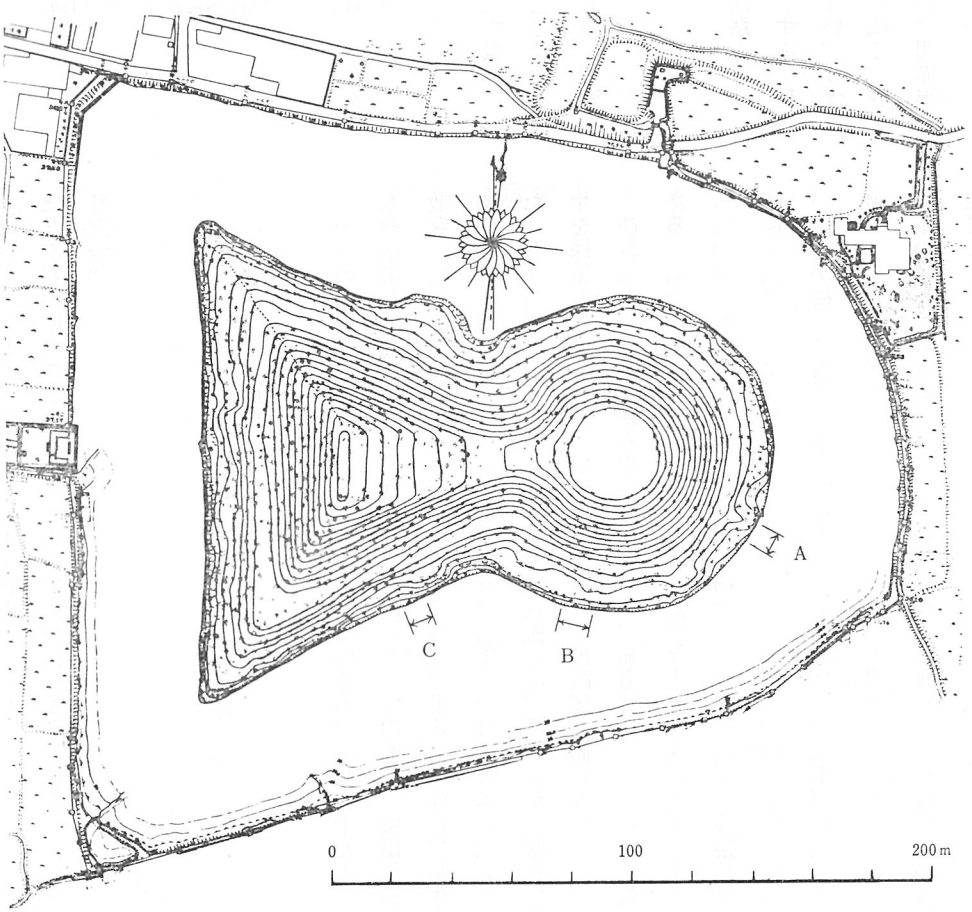
（佐藤利秀）

白鳥陵墳丘裾崩壊箇所の調査

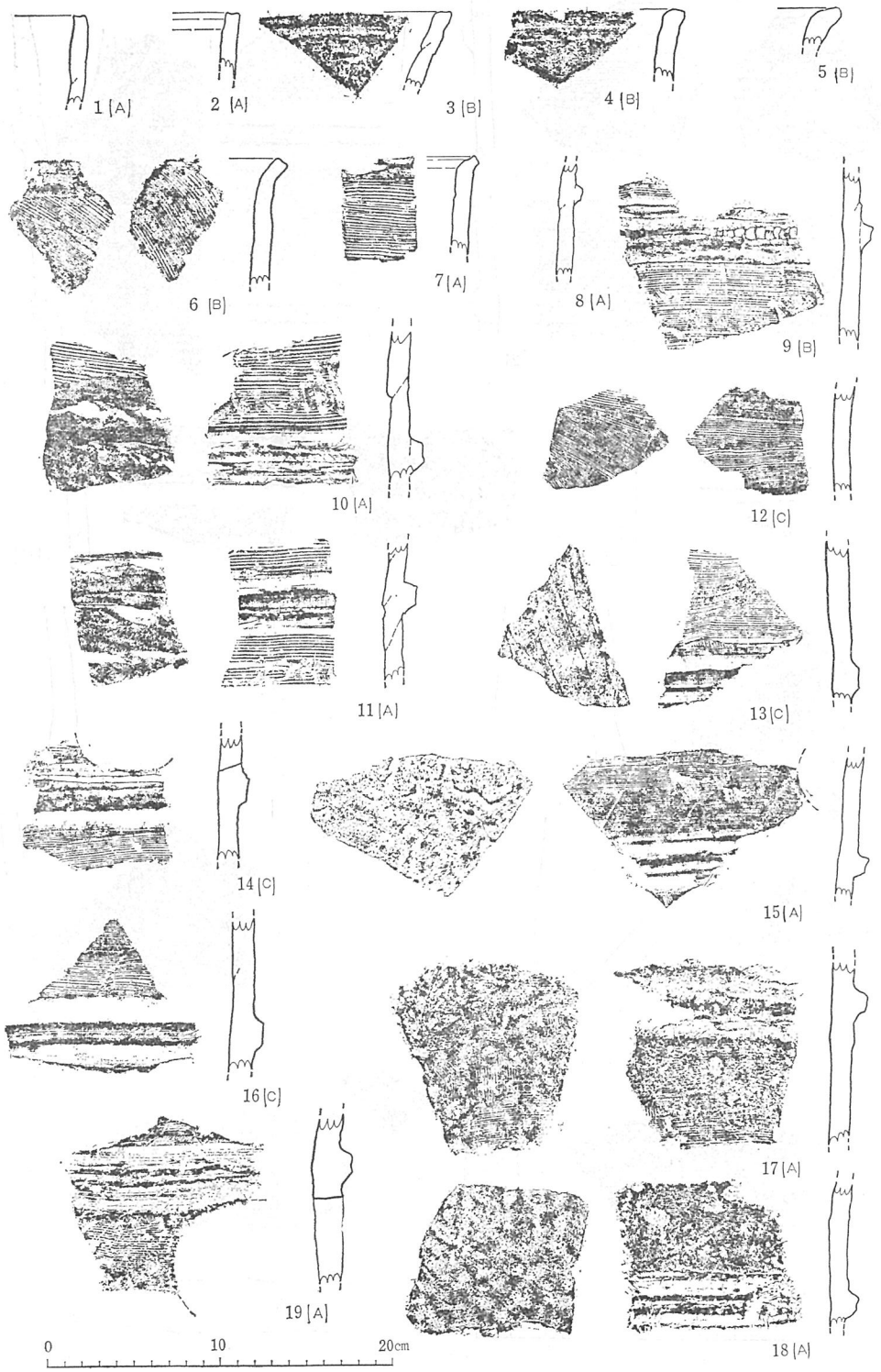
当陵の墳丘裾には埴輪列がめぐらされているが、昭和五十五年十月濠水を落水したところ、墳丘裾が三箇所にわたって崩壊し、埴輪片が露出散乱しているのが認められた。そこで、急遽、現状を記録し、保存処置についての対策を考究することになり、同年十一月一日に調査を行なった。調査は、埴輪露出地点を略測・写真撮影し、原位置から離れた埴輪片を採集した。これらの埴輪採集地点は、後円部東側のA地点と、南側くびれ部分を中央に挟み相対するB地点、前方部側のC地点の三箇所である（第28図）。これらのうち、A地点では大木を挟み約五メートルにわたって封土が削り取られ、埴輪の側面が露呈している（図版五3）。特に南側部分では、約一〇センチの間隔をおいて、円筒埴輪が隣接しているのが観察される。原位置を離れた埴輪片は、一部水際付近にまで散乱している。B地点、C地点では、墳丘裾が数十センチ程削り取られているのが認められるものの、埴輪列は観察できない。付近では埴輪片が散見できた。

今回採集された遺物は、埴輪片のみであり、総数一〇八点を数える。それらのなかには、墳丘裾の埴輪列以外のものが含まれている可能性もある。そのほとんどが朝顔形を含む円筒埴輪片で、他に形象埴輪片一点も含んでいる。

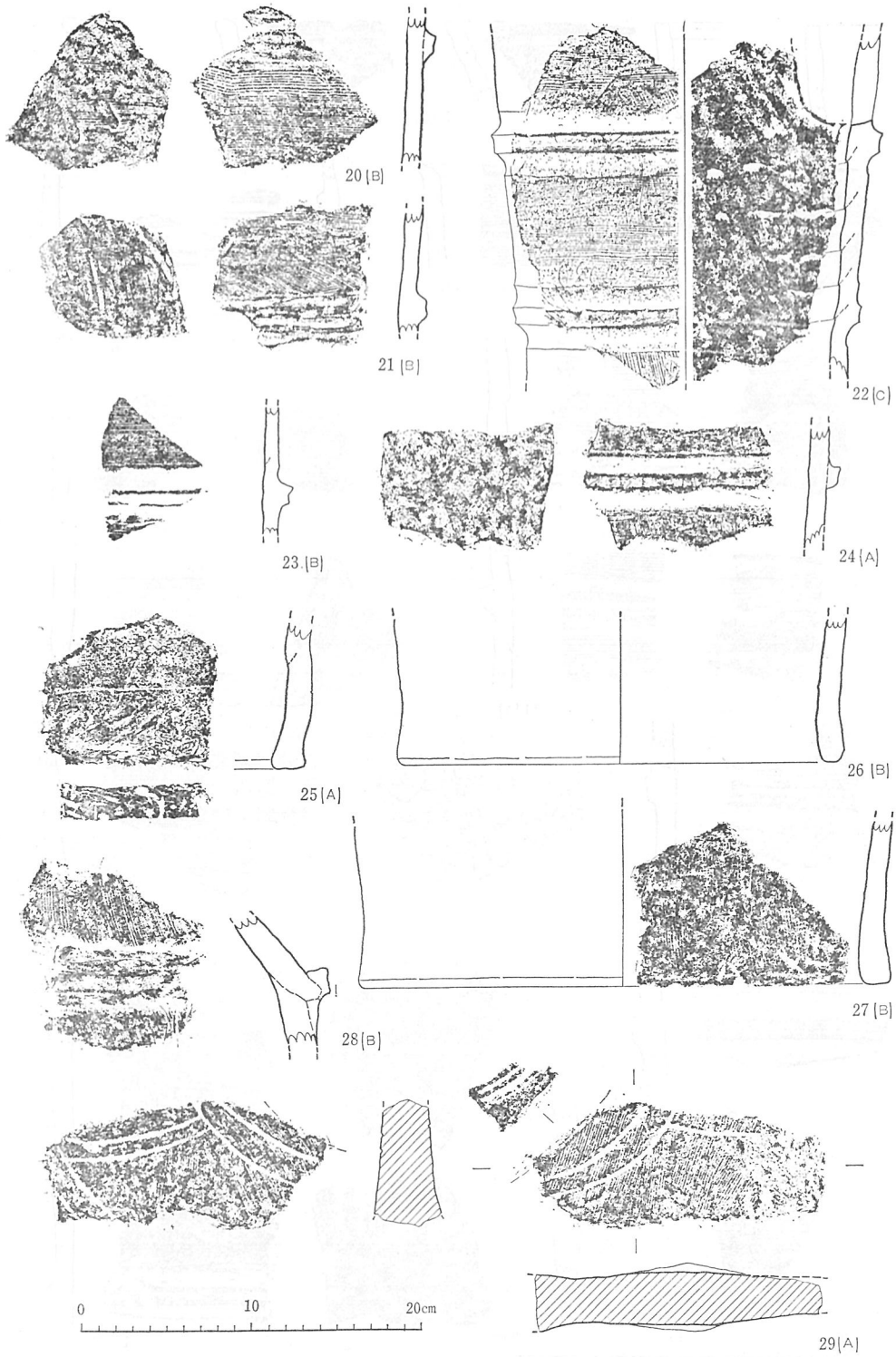
円筒埴輪（第29・30図）　全貌を推定できる資料はほとんどないが、口径は三〇～三五センチ前後、底径は二五～三〇センチ前後に復元できる。赤褐色系の色調を呈するいわゆる埴質のものと、堅緻な焼成を示すいわゆる須恵質のもの、および両者の中間的な焼成を示すものがある。量的には須恵質のものは少なく、ほとんど埴質のものである。黒斑は認められない。いずれも胎土にはやや多くの小砂粒などを含んでいるが、一部、茶色粒子を含むものもある。しかし、これらの色調・焼成・胎土における差異は、調整・形態上区別されるものではない。突帯は断面が低い台形を呈するものがほとんどを占め、その幅に若干の相異が認められるにすぎない。その中にあって8は、突帯が丸味を有しており、その器壁の薄さと合わせて注目される。底部はどっしりと安定した形状を呈するもの（25・27）とやや華奢な観を示すもの（26）とがある。外面は25がやや強く斜方向に撫でて仕上げて



第28図　白鳥陵調査箇所位置（1/2,500）



第29図　白鳥陵出土品(1)（1/4）



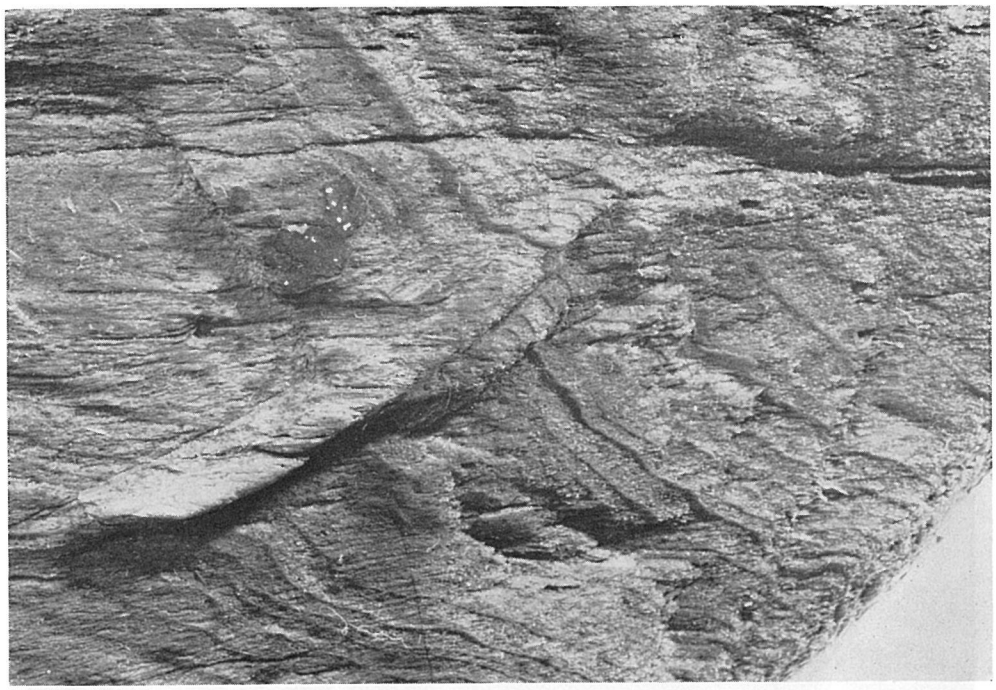
第30図　白鳥陵出土品(2)（1/4）

いるのに対し、27は板状工具で押圧を加えており、その上に淡い沈線がめぐる。また、25は底面に藁様のものの上に置かれた痕跡がある。これに対して、口縁部の形態はほぼ直立するもの（1・2）、緩やかに外反するもの（3）、短く外反、もしくは肥厚するもの（4～7）というように、変化に富む。しかし、このような口縁部に見られる形態上の多様性は、調整手法においては観察されない。つまり、胴部は内面の調整に刷毛目工具を使用している例はあるものの、基本的には内面は撫で、外面は横刷毛目によって仕上げている。外面の横刷毛目は、そのほとんどが、中途で工具を止めながら施したように見える、いわゆるB種横刷毛目であるが、その際、斜方向にはいる条線には明瞭なものとやや不明瞭なものがある。

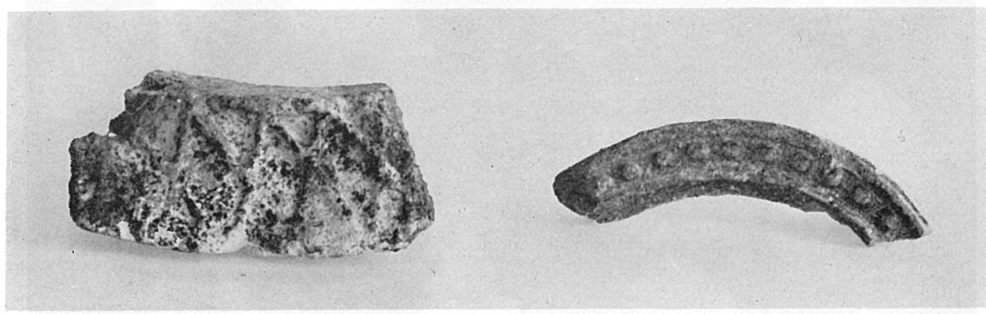
28は朝顔形埴輪の体部から肩部にかけての破片で、その境には若干上向きの「コ」の字形の突帯を設けている。断面で観察すると、この突帯は体部と肩部を接合する際の鎹（かすがい）の役目をも果たしている。外面は縦刷毛目を施した後、突帯との接合部を横撫でしているが、肩部との接合面には、横撫ではほとんどなされていない。

形象埴輪（第30図29）　現存最大高七・二センチ、最大幅一七・四センチ、厚さ二・六～四・〇センチを測る横長の厚手の製品である。全体を斜方向、もしくは縦方向の刷毛目で調整した後、直弧文系の文様を刻線として表わしている。破損している部分が多いが、一部、原初の面をとどめており、本来は図に破線で示した方向にのびていたのであろう。また、下面には接合痕が認められる。このような事実から考えて、蓋の四方立飾の基部に相当する可能性が高いと思われる。

（福尾正彦）



1　成菩提院陵駐車場出土燈台台座（細部，中央左が漆残存部分）



2　成菩提院陵駐車場出土宇瓦（左）　鐙瓦（右）

3　白鳥陵埴輪露出状態（A地点北側）